

隨筆

近頃思うこと(その三)

長浜 南城

直立不動の姿勢でお話しをする時は、何となく堅苦しい内容になるが、炉辺談話で炉の側

特に薩摩琵琶から開放、壮烈の気を抹消す

に作ったのが現在の「三井の晩鐘」だという。京の五条大橋の上に大理石の弁慶と牛若の戦いの像がある。童話の世界の人物のように、二人とも如何にも愛くるしく、ネオンの中に

例え弾法を達者に弾き、美しい歌を歌っても、一抹の味のない絃、味のない歌調であれば、未だ芸道の奥儀に到達しないと言える。

それは、撥、絃、タイミング、強弱、高低、緩急、発声、歌調、作曲等々、総合的な諸条件が整備され、それが浑然一体となり、聴く人々の心の底に、物のあわれがしこりとなって何時迄も脈動する。私はこれを「味のある琵琶」と言う。

誰が聴いても判りやすい歌詞や撥こそ、人の心を打ち感銘を与えるのであるから、外国の音楽にはない渋くさびた味の邦楽の完成に精進したいものである。

海外留学生生活をした私は、外国の音楽も充分聴いて来たのであるが、未だに洋楽に親しみ得ないのは、斯の様な「味」に関する心境

此状態は近藤派、特に土方歳三等の甚だ快とせざる所で、機あらば芹沢を失脚せしめて近藤勇を首班となし、組の純一的団結を強固にすることを念願として居ったのである。而も謹厳な近藤に比し芹沢は粗暴の振舞い多く増長我慢の風あり、隊の綱記を保つためにも幾多の難点を以っていたので、片時も早く肅清をせねばならぬ。此の二つの止まれぬ事情のため最後の手段あるのみと心に決し、芹沢暗殺の計画が進められた。

それは夏の昼下り、隊の幹部連により島原にて酒宴を催し、殊更に芹沢と其腹心に過度の酒を勧め、したたかに泥酔せしめた上、夜に入って駕を連らねて隊に戻ったのである。芹沢は此日頃、強引に己が女としていた四条堀川辺りの呉服屋の後家と呼び寄せて本座敷に、平山五郎は島原より連れ帰った娼婦と次の間に裸の儘同衾したその夜中、沖田総司外数名の刺客により芹沢暗殺は行われた。折柄激しい夕立の音にまぎれ、庭園に廻った刺客は縁側に上り、一挙に奥座敷の芹沢と次の間の平山を襲撃、物をも言わず切り込んだ。さしもの芹沢も不意の一撃に深手を負い、床の間の刀を取る間もなく縁側を家人の居間に逃れんとしたが、部屋一杯に張られた蚊帳に足を取られて前めりになる上から刺客は追打ちに切り下げたが、刀は障子の鴨居にガツと切り込んだ。しまったと刀を引き諸手突きを

と観点に基本的なギャップが蔵存するからである。兎に角、琵琶は伴奏と歌と、一人二芸であるので、この出発点からが洋楽に比べて難しい問題である。

遺醉迷語

木村 維水

学あって書くのではない、才あって語るのではない、遺醉と云っても盃を把りつつの不謹慎ではなく、ただ折にふれての想念も至極あやふやな危っかしい、取りとめもない世迷い言と御読み捨て願いたい。

去る四月二十日静岡県民会館において、赤心会長森鶴堂氏主催久能山東照宮奉納琵琶吟詠舞大会が開催され、京都から植村實水氏と共に協賛出演し、まことに錦上添花ならぬ汚点を印したが、同夜は油山温泉にて盛大な慰労宴を催され、飲を尽した後別室において森鶴堂氏、望月亞江氏、鈴木密水氏、中谷襄水氏、吉野洲水氏、田中篁水氏、植村實水氏の諸先輩と共に夜の更けるを忘れて芸談に花が咲き、何れも博識経験深き方々の身近かの事柄についての御造詣深きお話を拝聴して、此上ない感銘をいたしたものである。其の話題の中に、恰も当日吉野洲水氏の演奏された石川富士雄氏作「新撰組」の中の

「土方歳三大上段」と云う一句について、そもそも室内の闘争において、大上段に剣を使うと云う事はありえないと云う説をされる方があって一しきり話はこれに集中した。これは全く同感の事であって、殊に旧い京都の旅籠屋の二階座敷は天井も低く、大上段に剣を構えたならば、切先はおそらく天井に叩いて自由を失い、而も全身隙を生じて敵につけ入れられるは必然で、剣客の把る刀法とは思えないのである。かかる室内の乱闘は須らく間髪を許さない一撃必殺を期しての横斬、突きの手あるのみと思われる。

新撰組が京都に駐留するため始めて草鞋を脱いだのが、壬生村郷士十人衆の筆頭八木源之丞屋敷であった。この八木家は筆者の家の実家で、時の家長八木源之丞は家内の曾祖父である。

新撰組は此屋敷を本営として玄關、次の間座敷を使用して幹部の宿舎に当て、局長芹沢とその腹心の平山五郎が占拠し、近藤勇一派は坊城通りを隔てた向いの新徳寺(永源寺派の寺で現存)に屯し、隊士は八木家の庭園の東北隅の離れ家と、坊城綾小路角の郷士前川家を使用した。

新撰組が京都に入った当時は、局長に芹沢、近藤勇の両頭を頂き、各それぞれの腹心の隊士に守られて謂わば二派連立の形であったため低流する対抗意識があり、而も芹沢は水戸藩の出身で士分であり、近藤は郷士の出

身であるため、序列は芹沢を先とした形であった。此状態は近藤派、特に土方歳三等の甚だ快とせざる所で、機あらば芹沢を失脚せしめて近藤勇を首班となし、組の純一的団結を強固にすることを念願として居ったのである。而も謹厳な近藤に比し芹沢は粗暴の振舞い多く増長我慢の風あり、隊の綱記を保つためにも幾多の難点を以っていたので、片時も早く肅清をせねばならぬ。此の二つの止まれぬ事情のため最後の手段あるのみと心に決し、芹沢暗殺の計画が進められた。

それは夏の昼下り、隊の幹部連により島原にて酒宴を催し、殊更に芹沢と其腹心に過度の酒を勧め、したたかに泥酔せしめた上、夜に入って駕を連らねて隊に戻ったのである。芹沢は此日頃、強引に己が女としていた四条堀川辺りの呉服屋の後家と呼び寄せて本座敷に、平山五郎は島原より連れ帰った娼婦と次の間に裸の儘同衾したその夜中、沖田総司外数名の刺客により芹沢暗殺は行われた。折柄激しい夕立の音にまぎれ、庭園に廻った刺客は縁側に上り、一挙に奥座敷の芹沢と次の間の平山を襲撃、物をも言わず切り込んだ。さしもの芹沢も不意の一撃に深手を負い、床の間の刀を取る間もなく縁側を家人の居間に逃れんとしたが、部屋一杯に張られた蚊帳に足を取られて前めりになる上から刺客は追打ちに切り下げたが、刀は障子の鴨居にガツと切り込んだ。しまったと刀を引き諸手突きを

入れて仆した。平山も次の間で惨殺され、ここに芹沢暗殺は成功した。引続き芹沢腹心の隊士達は、次ぎ次ぎに屯所の庭で斬られて隊の肅清は断行され、いよいよ皆様御馴染み近藤勇隊長の統べる新撰組の活動が始まるのである。此の芹沢襲撃の状況を見ても、室内における剣の扱いかたの是非がはかり知れるのである。此の芹沢暗殺の事件は、当日芹沢が逃げ込んだ蚊帳の中に寝ていた当時十六才であった八木為三郎老(家内の大叔父にあたる人で、長じて分家)より親しく聞いた実話である。新撰組の本部として使用した屋敷は、其後庭園を整理し貸家を建てて変貌したが、家屋その物は玄關、次の間、奥座敷等当時の儘に現存し、刺客の切り込んだ居間の鴨居の刀痕も残っている。(此項おわり)

九月十九日昼・夜 東京 第一証券ホール

水藤 錦 穰 演奏会

一門と絃友出演

(賛助出演) 鈴木密水・浅野晴風 その他

切抜帳から (三二)

平井春嶺



○ 終戦の真相 (一〇)

六、天皇陛下六巨頭を召されて
心中を御洩し遊ばさる

併し当時に於ける陸軍大臣の主張は「我方は今ともかくソ連に仲介を頼んで、その返事を待っている所なのだから、その返事が来たらから事を決すべきである」というのでありまして、結局一応ソ連の返事を待つこととし、それまでこの宣言については我方の見解は、何も表明しないという方針にきめたのであります。

私はこの機会に少しくポツダム宣言について申し上げ度いと存じます。

それ以前米国は日本に対して、常に国家としての無条件降伏を要求して参りました。即ち独逸と同じく日本は国家を解体して降伏せよというのであります。

然るにこのポツダム宣言の条項をよくよく読んで見ますとこの米国従来の主張とは全く異り日本国を認め、そして日本国政府がその宣言に掲げられている条項を実行することを条件として、戦争を終結せしめようという終戦の提案の形をとっているのであります。無条件降伏という言葉は第十三項に日本軍隊の無条件降伏という文言はありますが、それは

戦争終局の条件の一つとして掲げられているので、国家としての無条件降伏ということはどこにもないのであります。即ち当時の私共の考え方は降伏という形で戦争を終結はしたくない、換言すれば Surrendered Peace、は欲しない。協定した平和即ち Negotiated Peace、を目標として居りましたので、このポツダム宣言はその意味に於て特に重要に考えたのであります。東郷外相は、これは寧ろ有条件講和であると説明されました。

さて政府はソ連からの回答を待ちましたが、ポツダム会議は八月に入りまして。丁度英国の総選挙でチャーチルの保守党が敗れて、アトリーの労働党内閣になったりしました。スターリン、モロトフは仲々モスコイに帰って参りません。やっと八月六日頃モスコイに帰る見込となりましたので、その時を待ったのであります。

(次回は、原子爆弾の広島攻撃とソ連の対日宣戦布告 (以下次号))

狂醉亭漫録 (四十)

古谷 寛水

赤穂事件は既に仇討決定まで筆を進めたがその以前一寸触れて置いた浅野家復興請願の件は結局不発に終わったのだが、之は比較的重要な事であるのでその概略を紹介する。本件に関する多川九左衛門、月岡治右衛門

残暑御見舞

旭会 師範

柴田 旭堂

神戸市葺合区上筒井五ノ五二
郵便番号 651
電話 〇二 一一六一番

の両使者は、三月廿五日赤穂出発、四月四日江戸着、直ちに各方面に問合せの結果、赤穂藩に対する副受城使御目付荒木十左衛門、榊原采女の両人は既に三月廿七日西下した事が判明した。多川、月岡の輩にして若し一人前の分別が有れば、直ちに在府の御目付に願意を申請すべき筈なのに、凡物の彼等は途方に暮れ、大石からの訓令も打忘れ、人も有ろうに浅野の江戸家老藤井又左衛門、安井彦右衛門の兩名に相談したので、両家老は仰天し、周章狼狽、多川、月岡を同道し、此の詳細を大垣侯戸田采女正に上申した。戸田侯は此件は、忠義の士を却って不忠の士と誤解させる暴挙と判断し、赤穂の衆に一書を贈った。

その内容の一部を抄録すると、
「以両使被差越之候紙面之趣、家中之面々無骨之至に候(中略)内匠日来奉重公儀被致勤仕事、各存知之事に候。内匠家中奉公の筋は、速に其地引払、城無滞被相渡候段、奉重公儀内匠日来之存念に可相叶候間、不及申候得共、追々指図之通被相守、早速穩便に被退候段肝要之事に候。(以下略)」

多川、月岡両使は之を受取り、藤井、安井の両家老は上意奉戴の勸告状を附托し、尙又両使出府の趣意を浅野大学に報告したので、大学氏からも赤穂開城の諭告を發し、両使は之等の諸牒を帯びて勿々に引返し、四月十一日赤穂へ帰着した。

義士巖頂の室鳩巢すら、大石を責めて「良雄是に於てか人を知らずと謂うべし。(中略)」

意うに二子素より才辯の好きものありしかば良雄と雖も虚誉に眩して之を用いしならん。(中略)嗚呼人を用いるの際、慎まざる可けんや」と論じている。然し之は前述の如く大石は此の不首尾を予知し乍らも、不良分子淘汰の方便に敢て実行したとも解せられる。多川、月岡の帰着と同時に大石は諸牒を一見し、予で覚悟の事とてさまで驚かず、直に城中大集会を催した。前日の籠城論死論に風を喰って欠席した連中も、開城と聞いて概ね来会したので、大石は采女正の諭告書其他を披露し、縷々説明の上「事茲に至つては一旦開城に決定し、官使の来臨を待ち、更に大学殿御跡目の儀歎願し奉る外は御座るまい。」と投げけるが如く言出た。怯懦の輩は望む所又忠義の士は既に仇討敢行の密約ある事とて、原惣右衛門の如きも「如何にも茲に至つては大石殿の御意見に従うの外は御座るまい。」と答え、衆議は直ちに一決した。

浅野家関係の大小名一同からも諭告使は続統到着、戸田采女正からも家臣正木笹兵衛、箕渡平右衛門が再応諭告書持参、先着の家老戸田権右衛門を通じ開城を懇命されたので、四月十二日引続き大集会を催し、開城及離散の準備、民政の処分等が評議決定されたのである。その内容を略説すれば、

一、受城使に引渡すべき本城備付の武器其他の整頓。是には一々目録を作り、一目瞭然たらしむる様準備させた。
二、城内の清掃。受城使經由の道路橋梁の修

残暑御見舞

鈴木 叫水

名古屋市昭和区向山町二
郵便番号 466
電話 (75) 七九七四番

残暑御見舞

錦心流琵琶・詩吟教授
篁水会々長 田中 篁水

金沢市天神町二丁目六番十二号
郵便番号 920
電話 (市外局番) (31) 五三五八番
(市外局番) (0) 七六二

残暑御見舞

「京絃」主幹
植村 翼水

京都市左京区下鴨上川原町四八
郵便番号 606
電話 (781) 〇八〇九番

繕清掃。

三、民政の処分。就中藩札引換の処分。

之は家老大野九郎兵衛が、藩札を蓋発し、硬貨を吸聚したので、一旦廃藩の節には不換紙幣に成るので、大石は藩庫に在る金銀一切を取調べ、奉行岡島八十右衛門に命じ、札座に於て藩札一貫目につき銀六百目の率で引換させた。

尚四月十三日には引続き城中集会を行い、藩札引換充当金以外の金銀を悉く持出した。

御納戸金 一、二〇〇両
御台所預金 二、七〇〇両
合計 一六、四〇〇両

と計上された。其の配当評議には、小人を能辨ならしめ、儒夫をして忽ち勇者に変ぜしめ、慾張連は喧々囂々、之が世に謂う赤穂離散の金評定である。

大石は衆を押えて、浅野家菩提所及び由緒の寺々への寄付金を第一に除外する旨を言渡し、決定した。後に其金を以て

華岳寺へ 田畑三町五反一畝六歩
高光寺へ 田畑 五反三畝九歩
大蓮寺へ 田畑 四反五畝廿九歩
遠林寺へ 金子 五十兩

を夫々寄進した。
第二に、先君奥方瑠泉院殿の御化粧料を返上した。之は御入典の際の持参金で、後藩庫に収め低利にて人民に貸付け、其利息を奥方の御用に充てたもので、前記御台所預金二千七百兩がそれである。(未完)

辨才天



松野紫雲作

八百よろず
廻る海原洋々と
金波銀波におくられて
中にやさしき御姿
尽きぬ情の流水に
土地豊饒の神として
うつりも早き世の中に
知恵を授くる御女神
話す言葉の神として
手にせざる響の琵琶の音に
弾く音に響く礼智の韻
善財童子を始めとし
柔よく剛を制しつゝ
導き給ふ弁才天
琵琶の音にひた伏して
心の中を慕いつゝ
宏大無辺の力ももて
尽きぬこの世の末までも
尽きぬこの世の末までも

五家の荘と湯西川(下)

堀口至 紋

或る日土中學校寄宿舎にいた大典君を案内役に、筆者と英国人は自動車で熊本県五家

の荘の入口まで行った。こゝには三軒ほど商店があり、五家の荘から産物をこゝまで持って来て米などと交換したり、子供らは郵便物を持って五家の荘へ帰る。

大典君の案内で山の細道を上ったり下ったりして行くほどに、山の傾斜畑一面に白い布を敷いたように見えるのが蕎麦で、一面黄金色を呈せるは粟、これらは五家の荘民の常食である。これらの作り方も原始的である。というのは冬期に山に火をつけて焼く、すると草や燃え易い小さい木は燃えて灰になる、そこへ種子をばらまくと灰が自然に肥料となるのである。私と英国人は、ありの儘の五家の荘が見たいので、椎原の大典君の家に行くと奥の豊の部屋に案内された。隣室をのぞくと炉を囲んで一家団らん、よもやま話の最中で、その真ん中には天井から鍋が下がって玉蜀黍が煮えている。一本貫って食べてみた、塩気を含んでおいしい。

夜になると袴をつけた青年が来て、私達に五家の荘のおいさを話して呉れた。この青年は五家の荘で教養ある一番えらい人だそうで、その当時高等小学校を卒業しているといふ。

大典君の母が記念として私に蔓くさで造った入れものを私に心をこめて二個造ってくれた(これは以前NHKの「ふるさと」の歌祭り、秋田県の能代からテレビ放送をしたとき、丁度これと同じものが舞台に出た)。大典君の母はこの二個の贈り物を持って、白脚絆に

白足袋、わらじばきで国境まで私達を送ってきて下さった。

関東地方には源氏に由緒のある人が多く、熊谷直実が一の谷の戦に教盛を手にかけてことから蓮生法師となり、熊谷寺に教盛の霊を弔ったことは有名で、今でも熊谷寺には直実の遺品が宝物として蔵されており、その境内には直実の廟がある。尚東上線の武蔵嵐山駅の近くには菅谷館とあり、そこには嵐山重忠の像が建てられてあり、高崎線の岡部駅近くには岡部六彌太の墓が残っている。同じ高崎線の深谷市には平忠実の墓が残っている。同じ高崎線の泉陽市には平忠実が開拓したという温泉電車で約二時間の鬼怒川温泉から東武線里湖畔を通り一時間半で湯西川温泉に着く。奥日光の端と思われるが、昔平忠実が居つてその子孫が伴久旅館を経営していると伝えられ、平家の用いた鎧兜など宝物としてこの旅館に蔵されている。この地は千古の伝説を秘め古湯溢るゝ平家の里、素朴な村情、幽玄な仙境と謂われ、今は四季折々の遊園地となつて行楽の里の名が高く訪客を招いている。

想夫恋

柿本錦城作

さても弾正の大弼仲国は 寂慮畏み秋の夜の 最中の月に鞭を当て 嵯峨野に駒を進め 行く 小鹿鳴くてふ詠じけん 此山里に分け 入れば きらめき渡る白露に 尾花が袖も打ちしめり 鳴き交したる虫の声 独り聴く夜の 手弱女は やるせ涙の玉琴に 雲井の月や

調むらん 仲国駒を急がせて 亀山近く到りしに 峯の嵐か松風か 尋ぬる君が琴の音か とめつゝ行けば一むらの 松の蔭なる片折戸内に 聞こゆる爪音を 手綱ゆるべてつくづく と 聴けばまことや月花の 御遊の筈にはんべりて 笛の役仕うまつりし時 聞き覚えつる調べにて 殊更曲は想夫恋 さては紛れもあらじとて 門ほとほとと叩き これは仲国内裏より 御使いに参りたり あけさせ給え あけさせ給えと訪ふに 琴弾きさし 静まり返つて音さえも なく虫何を奏づらん 仲国心を定めつゝ 是非もあらじと片折戸 荒々しくも押明けて 妻戸の縁に進み寄り 何とてかゝる処には 御渡りさむろうぞ 君には明け暮れ思し沈ませ給うと 御消息を参らすれば 御文顔にあて給ひ しばし言葉も涙の雨に晴れたる月も曇るらん 仲国も そぞろにせきくる涙を押え 兎角なくさめ参らせつゝ 上の衣 しぼるばかりになりけり やゝありて 御返りごと引結び 君にもさこそ待ちわびておわすらめ 重ねて御迎ひに参るべし 待たせ給えと云い捨て、駒を早めて立ち帰り ありし次第を残しなく 奏するほどにほのほのと 秋の長夜も明けにけり 秋の長夜も明けにけり。

名曲「小督」の演奏時間を短縮する目的で謡曲なども参考に作詞してみました。 一柿本!

京都護国神社

みたま祭奉納

昭和の英霊を祭る護国神社みたま大祭が八月十三日から十六日に亘る四日間厳修され、

毎日午後六時半から八時半まで日本民主同志会の主催で琵琶楽をはじめ琴、尺八、三絃、吟詠、詩舞、日舞など多彩な邦楽の献奏があり、琵琶部は京都琵琶協会が協賛して十三日羽衣(田中颯水、矢吹華水)、十四日軍神乃木(美登里進水)、十五日千曲川(植村寛水)、十六日秋風故郷の山(中島旭穂)がそれぞれ厳肅に奉納された。(敬称略)

京都会馆にての

水藤錦穰先生

井上兼子

はからずもみ会いまつりてやさしくも お言葉たましいことの嬉しき 追従ゆるさぬ御才能をいささかも 礎に出でまさぬに心打たれつ

母君によく似ましたる御愛息との むつまじきさま見るにともしき

日本琵琶振興会 六月三十日午後一時から 研究 会 東京下谷三丁目林方に於て開催、鈴木密水氏を始め出席者多数、特に当日は某氏の「撥に就て」の有益な講話があり盛会であった。